Surfer's Ear: photo by Mick Sowry, Library: photo by courtesy of Clark Little

わたしは音楽を流しながらでないとシェイプできない。音楽が自分の原動力なのだ。ファクトリーには350ワットのステレオと高さ120センチのバススピーカー、そしてカセットテープの詰まった箱が置いてある。わたしは田舎に住んでいるので、ボリュームを目いっぱい上げられる。部屋のなかを音楽で満たすのだ。ある意味、音楽もサーフボードをつくるためのツールといえる。わたしがシェイプするときに好んで聴く曲をいくつか紹介しよう。

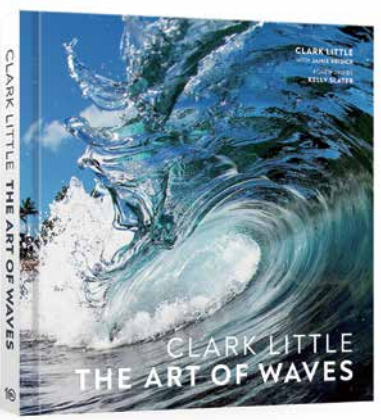
— モーリス・コール

1.「ザ・ゲットー」ダニー・ハサウェイ、1972年
2.「風の中のマリー」ジミ・ヘンドリックス、1967年
3.「オライオン」メタリカ、1986年
4.「マンデラ・デイ」シンプルマインズ、1989年
5.「グラビティ」ボリス・ブレッチャ、2019年

Library ｜ サーファーの図書室

クラーク・リトル写真集『THE ART OF WAVES（ジ・アート・オブ・ウェイブス）』

文：ジョージ・カックル



サーファーはもちろんのこと、波がつくりだす自然美をとらえた瞬間にだれもが心奪われるクラーク・リトルの写真。本誌おなじみのジェイミー・ブリシックが編集に携わり、ケリー・スレーターがまえがきとして言葉を寄せていることからもこの写真集のクオリティがうかがえる。洋書だが、日本でも購入可能だ。“clark little the art of waves”と検索してみよう

もう20年近く前のこと。僕が朝早く鎌倉駅のエスカレーターをプラットフォームに向かって上がっていくと、よく見かける男がいた。彼はいつもダブダブの黒いスーツを着ている。まるで毎日喪服を着ているようだった。クリント・イーストウッドの西部劇に出てきそうなアンダーテイカー。彼はいつもひとりで遠くを見ていた。愛称はレゲエ・リッチ。ハワイ大学のラジオ局KTUHに通っていた若いころはドレッドヘアで、レゲエのラジオ番組を担当していたのでそう名づけられたそうだ。本名はリチャード・タリー（以下リッチー）。鎌倉に住んでいたリッチーは、海外アーティストやフォトグラファーと取引する仕事をしていた。当時は新入社員だったため、スーツを着なければいけなかったという。2年目からは黒いスーツはやめてタートルネックを着ていたらしいが、サイズが合っていないスーツの印象が強すぎてだれもその姿は覚えていないだろう。

現在、リッチーはハワイのショアブレイクフォトグラファーであるクラーク・リトルと仕事をしている。クラークとリッチーは中学生のころからの友だち同士。よくアメリカンフットボールをして遊んでいたのだとか。中学校はホノルルにあるプナホウ。クラークの父親はもともとプナホウ高校とハワイ大学で写真を教えていたため、当初一家は高校のキャンパスに住んでいた。でもある日父がハワイのノースショアに家を買ったため、クラークはビッグウェイバーの弟ブロックと一緒に毎日バスで片道2時間かけて学校に通うことになる。クラークは中学2年生のころ、サーフィンをもっとしたくてノースショアの家の近くの学校に転校した。

クラークとリッチーの再会は、リッチーが日本の会社で4年間働いたあと、ふたたびハワイへ戻ってからのことだ。そのときリッチーが引っ越したアパートにたまたまクラークの友だちが住んでいたのだ。ある日クラークがそこへ遊びにいき、偶然リッチーと出会う。再会の瞬間は「おぉ！ 中学校一緒だったよね。一緒にアメフトやったよね！」という具合だった。

そこでリッチーはクラークに自分が今まで日本でやってきたアーティストのマネージメントや契約などの仕事をしてきたことを伝える。そして、「もしもいつか手助けできることあったら連絡くれ」と言った。でもそのときのクラークからは「大丈夫だよ。自分でできるから」といった気のないニュアンスの言葉が返ってきたそうだ。

しかし、ある日の夜のこと。クラークが電話をしてきて、リッチーにこう相談した。

「今からニューヨーク行きの飛行機に乗る。明日アメリカの人気番組『グッド、オーニング・アメリカ』に出るんだけど、これから一緒に仕事してくれないか」

正式には、『ジ・アート・オブ・ウェイブス』はクラークの3冊目となるハードカバーの写真集だ。最初の2冊は自費出版。当時のクラークは借金だけでなく、家まで担保にした。リッチーがクラークの家の前に印刷屋から写真集が届くのを待っていたら、届いたその量なんとコンテナ1台分。10000冊をはるかに超えている。リッチーが「写真集が届いたのはいいが、どうやって売るの？」と聞くと、クラークはこう答えた。

「それはリッチーの仕事だ」

リッチーは面食らった。だが小さいサーフショップや本屋に売り歩き、さらに地道に通信販売をすると、ラッキーにも完売した。自主出版だと本屋に置いてもらうことも、お金の計算や管理も大変だ。送料もかさむ。日本に写真集に送ると、本の値段より輸送費のほうがかかってしまう。

とはいえ、3冊目となる今回は写真集は「ペンギン・ランダムハウス」というメジャーな出版社から出版されたので、アメリカのすべての州で発売され、800軒の本屋で取りあつかわれている。それだけでなく、世界中の本屋にならぶ運びとなった。

そして今、クラークは超有名なフォトグラファーとなり、リッチーはスーツ姿ではなく、アロハシャツで過ごしている。●

©George Cockle / Surfers Journal